

「癒し」の認識 —高齢者・中年・若者の比較—

谷田 恵美子

Recognition of “Healing”—Comparison of Elderly, Middle, and Young—

Emiko TANIDA

要 旨

癒しは病気の治癒過程だけでなく、日常生活においても大きな影響をもつ。12項目からなる「癒し」尺度を作成し、その認識について構造化による高齢者・中年・若者の比較を試みた。2004年9月に調査を実施し、有効回答は高齢者169・中年178・若者174であった。

この尺度の標本妥当性は高く、信頼性は第1因子では高いが、第2・3因子ではやや低かった。構造化（共分散構造分析 AGFI0.94）し、癒しは笑顔や気配り、優しい言葉や励まし、気持ちを汲む・支援で大きな影響力があった。影響力の強い項目から働きかけると効果的である。

世代間を比較すると、中年では日常行事や家族、高齢者では自然からの影響を多く受けていた。反対に若者ではペットや家族の存在、高齢者では一緒にいることで影響が低く、多様な考え方がある。全体で見ると癒しは笑顔や家族によってもたらされた。さらに若者では言葉がけ、仲者存在があった。世代がもつ「癒しの認識」を把握した上でケア・ケア教育を実施すると効果的である。

キーワード：癒し、共分散構造分析、世代

Key words : Healing, Covariance Structure Analysis, Generation.

【はじめに】

現代社会はめまぐるしく変化し、多くの情報が入ってくる。そこには不安や多くのストレスを生じ、体や心に悪い影響が大きいと考えられる。現代社会は癒しを求めていると言える。癒した、癒されたと感じる経験はさまざまである。ヒーリング healing は心身に働きかけて生命力・自己治癒力を引き出し、治癒・回復を促す活動である。日本語では癒しと訳されていることが多い。

高齢者看護ではケアを受ける立場（高齢者）、ケアをする立場（多くは中年）、今後のケアを担う立場（多くは若者）が成り立つ。高齢者、中年、若者は癒しをどのように捉えているのか、理解したうえで看護実践・看護教育は必須である。すなわち高齢者看護

をするうえで、ゼネレーションギャップ generation gap を理解したうえで看護・看護教育が求められている。项目的な癒しについては多くの報告があるが、癒し尺度を使って構造化による世代比較をしたものはない。

【研究目的と調査方法】

研究目的：「癒し」尺度を使い、世代間（高齢者・中年・若者）の比較を行なう。

調査対象：高齢者、中年、若者（調査員の身近な男女2名に依頼、了解を得られた人のみ調査紙を配布）

調査方法：1. 調査 1) 基本的属性 2) 「癒し」、無記名・自己記入方式。

用紙配布、後日回収（未記入のみ、再度依頼。但し、無理じいはしない）。

調査員には調査実施前に約1時間のオリエンテーションを実施する。

2. 倫理的配慮：調査の意図、本人を特定できないを文書で説明し、了解を得た人のみ調査を実施する。
3. 期間：2004年8～9月。
4. 分析：統計ソフトSPSS、AMOS使用。

癒し尺度

「癒し」は看護職の癒しの経験¹⁾から、B. Beresonの内容分析手法による意味読み取りを用いて、看護職が捉えた「癒した」85・「癒された」144記述から10カテゴリーが見出された²⁾。このデータを参考に12項目からなる「癒し」尺度とその他（自由に選択できる）1項目の質問について、曖昧さや日本人の中庸的な考えを考慮した四肢択一の質問紙を作成した。

【結 果】

調査は2004年8～9月に意図に同意した人のみに実

施した。回収は536で、無回答の多かった調査紙を除き、有効回答は若者174・中年178・高齢者169で合計521（97.2%）であった。

1. 基本事項等について

調査対象の特徴をみると、若者は大学生以上の18歳から39歳で、平均21.2歳、医学・福祉系が62.1%と多かった。中年は40歳から64歳で平均49.4歳、83.7%が仕事を持っている。高齢者は65歳から87歳まで、平均72.4歳で、68.0%が無職である（表1）。男女比はほぼ半々であり、岡山県を中心に西日本が多かった（表2）。高齢者は若干田舎に住んでいる人が多かった（表3）。世代は高齢者が一世代、若者と中年は二世代が多かった（表4）。

2. 癒し尺度の結果（一元配置の分散分析、Bonferroni）

各項目を一元配置の分散分析（Bonferroni）で若者・中年・高齢者で比較した。「1. 優しい言葉がけ・励まし」、「2. 笑顔・気配りなどの態度」「3. 気持ちを汲んでくれる・支持してくれる」を除く、9

表1 年齢・性別、仕事（学生）、医療・福祉系の有無 n=521（%）

	人数	男	女	年齢範囲	平均年齢 (S.D.)	1. 職無	2. 職有	3. 学生	医療系・福祉系
若者	n=174	47.7	52.3	18～39歳	21.24歳 (3.2)	5.2	24.1	70.7	62.1
中年	n=178	49.4	50.6	40～64歳	49.38 (5.4)	16.3	83.7	0	6.6
高齢者	n=169	48.5	51.5	65～87歳	72.35 (5.7)	68.0	32.0	0	0

表2 地域（%）*下宿生は実家を記入

	1. 岡山県	2. 中国地方	3. 四国・九州	4. 近畿	5. その他	無答
若者 n=174	22.0	17.3	21.4	23.7	15.6	0
中年 n=178	23.0	18.5	16.3	24.7	16.9	0.6
高齢者 n=169	24.3	16.6	22.5	21.9	13.6	1.2

表3 都市規模（%）

	1. 都市100万以上	2. 中都市15～100万人	3. 小都市15～5万	4. 郡部5万未満	無答
若者 n=174	12.6	31.0	25.3	29.9	1.1
中年 n=178	14.6	30.9	20.8	31.5	2.5
高齢者 n=169	7.1	32.5	23.7	33.7	3.0

項目で有意差が見られた(表5)。癒されたと感じた項目で「11. 宗教」「12. 時の流れ」は低値であり、予想以上に低かった。若者では、「4. 一緒にいる」「8. 仲間の存在」「9. ペット・ぬいぐるみなどの存在」に関しては他世代に比べ高値で、「7. 家族・家の存在」「11. 宗教」「12. 時の流れ」に関しては低値であった。中年は若者と高齢者との中庸的な回答で

あった。高齢者では、「6. 日常行事の参加」「10. 自然とのふれあい」「11. 宗教」「12. 時の流れ」に関しては他世代に比べ高値で、「5. マッサージ・指圧など」「9. ペット・ぬいぐるみなどの存在」に関しては低値であった。癒しにつながる12項目を示した。さらにその他、自由に選択できる項目を作成した。しかし、アロマセラピー・温泉等のリラクゼーションの関

表4 家族人数・世代 (%)

	一人	二人	三人	四人	五人	六人	七人	八人	十一人	無答	1世代	2世代	3世代	4世代	その他	無答
若者 n=174	3.4	2.9	14.9	37.5	26.4	9.2	5.2	0.6	0	0	9.8	66.1	23.0	0	0	1.1
中年 n=178	1.1	10.7	17.4	36.0	21.9	5.6	5.6	1.1	0	0.6	11.8	59.6	28.1	0	0	0.6
高齢者 n=169	17.2	42.0	11.2	5.9	8.3	7.1	5.9	0.6	0.6	1.2	58.0	14.8	23.7	0.6	0.6	2.4

表5 「癒された」と感じる事 (%) 1.ある 2.どちらかと言えばある 3.どちらかと言えない 4.ない

			1.	2.	3.	4.	無答	平均値	F 値	Bonferroni
1. 優しい言葉がけ・励まし	17~39歳 n=174		56.9	32.8	6.3	3.4	0.6	1.55	2.260	1若者 2中年 3高齢者
	40~64歳 n=178		42.7	45.5	7.3	4.5	0	1.74		
	65~87歳 n=169		53.8	29.6	10.1	5.3	1.2	1.64		
2. 笑顔・気配りなどの態度	17~39歳 n=174		61.5	27.6	8.6	1.7	0.6	1.49	2.174	
	40~64歳 n=178		44.9	46.1	6.2	2.2	0.6	1.65		
	65~87歳 n=169		49.1	40.8	6.5	3.0	0.6	1.62		
3. 気持ちをくんでくれる・支持してくれる	17~39歳 n=174		55.7	32.8	9.2	1.7	0.6	1.56	2.685	
	40~64歳 n=178		40.4	47.8	9.0	2.8	0	1.74		
	65~87歳 n=169		41.1	43.5	10.1	2.4	3.0	1.68		
4. 一緒にいる	17~39歳 n=174		56.1	26.6	11.0	5.2	1.2	1.63	4.258	* 1と2* * 1と3*
	40~64歳 n=178		28.8	54.2	11.3	4.0	1.7	1.84		
	65~87歳 n=169		36.3	36.9	12.5	10.1	4.2	1.88		
5. マッサージ・指圧など	17~39歳 n=174		31.0	23.6	20.7	23.6	1.1	2.34	3.604	* 1と3*
	40~64歳 n=178		16.9	42.1	24.2	15.7	1.1	2.37		
	65~87歳 n=169		11.8	34.9	22.5	28.4	2.4	2.63		
6. 日常行事の参加	17~39歳 n=174		8.0	21.8	43.7	24.7	1.7	2.82	7.796	*** 1と3***
	40~64歳 n=178		5.6	36.0	41.6	15.7	1.1	2.65		
	65~87歳 n=169		17.9	31.5	28.6	18.5	3.6	2.40		
7. 家族・家の存在	17~39歳 n=174		45.4	33.9	14.4	5.7	0.6	1.79	5.212	** 1と2* ** 1と3**
	40~64歳 n=178		53.9	36.5	6.2	2.8	0.6	1.57		
	65~87歳 n=169		59.2	28.4	5.9	4.7	1.8	1.53		
8. 仲間の存在	17~39歳 n=174		60.3	31.6	4.0	2.9	1.1	1.47	16.662	*** 1と2** *** 1と3*** * 2と3*
	40~64歳 n=178		38.2	48.3	10.7	2.2	0.6	1.76		
	65~87歳 n=169		30.2	49.1	10.1	9.5	1.2	1.96		
9. ペット・ぬいぐるみなどの存在	17~39歳 n=174		31.6	25.3	20.1	21.8	1.1	2.30	12.040	** 1と2** * 1と3***
	40~64歳 n=178		15.2	25.8	24.7	32.0	2.2	2.69		
	65~87歳 n=169		11.9	20.2	18.5	45.8	3.6	2.91		
10. 自然とのふれあい	17~39歳 n=174		34.5	31.0	24.7	9.4	0.6	2.07	5.121	** 1と3*
	40~64歳 n=178		27.7	49.2	12.4	10.7	0	2.06		
	65~87歳 n=169		45.0	33.7	14.2	5.9	1.2	1.79		
11. 宗教	17~39歳 n=174		2.3	5.7	8.6	81.6	1.7	3.66	18.108	** 1と2* * 1と3*** ** 2と3**
	40~64歳 n=178		6.2	6.2	27.1	59.9	0.6	3.40		
	65~87歳 n=169		8.9	17.2	26.6	45.6	1.8	3.05		
12. 時の流れ	17~39歳 n=174		12.1	14.9	24.7	46.6	1.7	3.02	7.143	** 1と3**
	40~64歳 n=178		9.0	28.2	33.9	28.2	4.2	2.80		
	50~87歳 n=169		13.1	28.6	28.6	25.6	4.2	2.58		
13. その他	17~39歳 n=174		6.9	1.7	7.5	38.5	45.5	3.42	0.591	
	40~64歳 n=178		1.1	2.8	3.9	34.8	57.3	3.70		
	65~87歳 n=169		2.4	3.0	4.7	36.7	53.3	3.62		

係項目が多くあがるのではないかと考えたが記載はごく少なかった。

3. 最近癒されたと感じた1・2番

最近、癒されたと感じた1番・2番を尋ねた。全体

では「7. 家族・家の存在」「2. 笑顔・気配りなどの態度」「1. 優しい言葉がけ・励まし」(図1)が高い。若者では「1. 優しい言葉がけ・励まし」36.3%、「4. 一緒にいる」22.5%、「8. 仲間の存在」28.2%が高い。中年では「5. マッサージ・指圧

図1 最近「癒された」感じた1番と2番 (若者・中年・高齢者の比較)

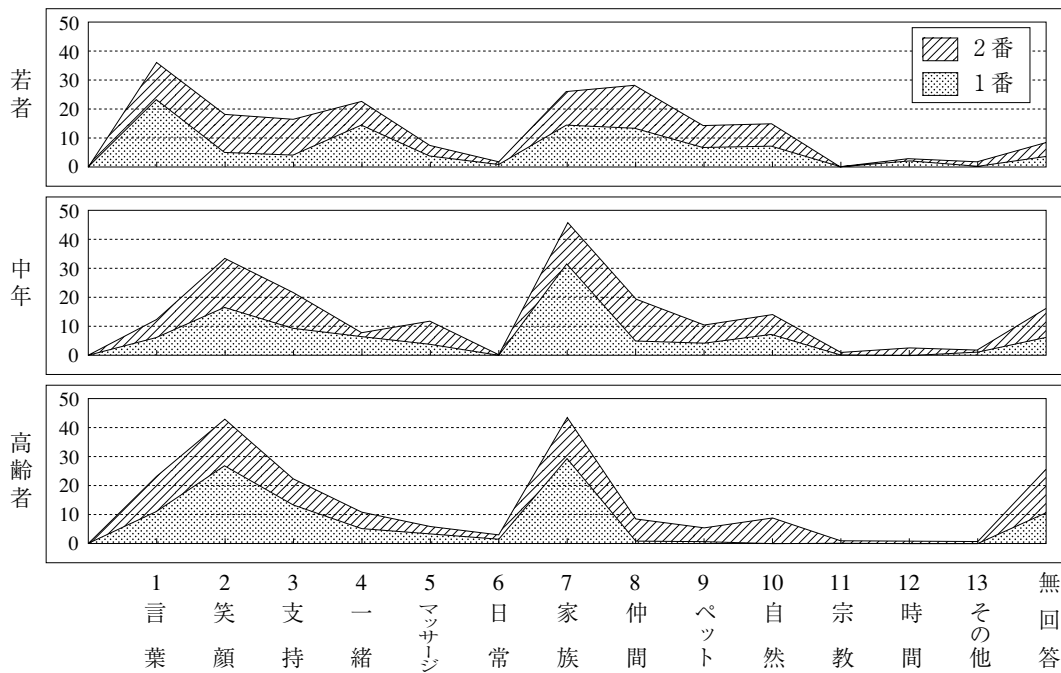


表6 癒し (n=521主因子法・プロマックス法)

全体 n=521 KMO0.849		因子1	因子2	因子3	命名 α係数
2. 笑顔・気配りなどの態度	笑 顔 2	.937	-.015	-.092	1. 関わり 0.839
1. 優しい言葉がけ・励まし	癒 優 し 1	.800	.042	-.035	
3. 気持ちを汲む・支持する	気 持 持 3	.731	-.003	.009	
12. 時の流れ	時 流 れ 12	-.016	.738	-.079	2. 時の流れ・自然 0.666
11. 宗教	宗 教 11	-.013	.608	-.044	
6. 日常行事の参加	行 事 6	-.005	.412	.255	
10. 自然とのふれあい	自 然 10	.110	.392	.170	3. 相互作用 0.610
4. 一緒にいる	一 緒 4	.106	-.074	.607	
8. 仲間の存在	仲 間 8	.254	-.099	.500	
9. ペット・ぬいぐるみ等の存在	ペ ッ ト 9	-.156	.001	.484	
7. 家族・家の存在	家 族 7	.066	.103	.407	
5. マッサージ・指圧など	マッサージ 5	-.004	.068	.386	
固 有 値		4.018	1.598	1.072	
累 積 寄 与 率		30.908	43.202	51.448	

など」13.9%が高い。高齢者では「8. 仲間の存在」「9. ペット・ぬいぐるみなどの存在」「10. 自然とのふれあい」が低い。

4. 癒し尺度の検討

癒し尺度の12項目で、全体n=521の結果について因子分析(主因子法・プロマックス法)を行った。KMO(標本妥当性の測度 Kaiser-Meyer-Olkin)は0.85で高く、三因子が抽出できた。さらに、三因子について検討し、「1. 関わり」、「2. 時の流れ・自然」、「3. 相互作用」と命名した。 α 係数(信頼度係数)は二・三因子で低かった。因子「思いやり」は多くの人と同様な思考をしているが、「2. 時の流れ・自然」、「3. 相互作用」の9項目は、人によって様々に捕らえられる項目と言える。ケアをするときにはこの因子負荷を考慮した、同様なかつ多様な項目として意識し、ケアを実施することが重要である。

5. 共分散構造分析

全体の結果について調査項目12を観察変数、因子分析を参考にし〔1. 思いやり〕、〔2. 自然な流れ〕、〔3. 寄り添う〕を潜在変数として共分散構造分析(AMOS、最尤法)による構造化を試みた。採用した構造は高齢者、中年では適切であるが、若者はやや不安定であった。放棄比C. R. (Critical Ratios)は1.96以上あり因果関係に意味を持つと考えられている。しかし、若者の「9. ペット・ぬいぐるみなどの存在」ではC. R.は1.6(標準推定値が0.15で低く)と低かった。そこで、この観察変数を除いた構造化を検討したが、結果に若干の変化(標準化推定値は「4. 一緒にいる」0.69→0.69、「5. マッサージ・指圧など」0.43→0.42↓、「8. 仲間の存在」0.72→0.73↑、「7. 家族・家の存在」0.42→0.41↓)があり、潜在変数〔3. 相互作用〕のみ数値が移行した。そこで、世代比較のために元の構造を採用した(図2-5)。

1) 潜在変数間の相関をみると、他の世代と比較して高齢者は潜在変数間相関が高い。三潜在変数すなわち自然を含み互いに影響している。一方、若者は〔2. 自然な流れ〕と他が低いことから、自然的な関わりは低く、人との関わりの中から癒しをとらえ

ている。

2) 標準化推定値をみると、三世代とも「2. 笑顔・気配りなどの態度(標準化推定値:全;0.85、若;0.87、中;0.89、高;0.82.)」、「1. 優しい言葉がけ・励まし(全0.80、若;0.76、中;0.82、高;0.82.)」が高値であり因果関係が強い。癒しを考えると他者の態度が大きく影響し、さらに心に響く言葉が影響する。

3) 標準化推定値による三世代比較では、若者は「9. ペット・ぬいぐるみなどの存在(若;0.15、中;0.33、高;0.36.)」、「7. 家族・家の存在(若;0.42、中;0.63、高;0.56.)」が低い。若者は同世代との関わりが重視され、家族やペットなどは癒しにつながりにくい。中年は「6. 日常行事の参加(若;0.50、中;0.67、高;0.57.)」が高い。中年は他世代と比べ、日々の生活を営むことで、癒し効果がある。高齢者「10. 自然とのふれあい(若;0.48、中;0.58、高;0.64.)」高く。「4. 一緒にいる(標準化推定値若;0.69、中;0.70、高;0.57.)」は低い。高齢者は他世代と比べ、自然からの癒し効果が高く、他者からの関わりが癒しにつながりにくい。

【考 察】

1) 「癒し」とは

癒しと聞いて連想する言葉には、不安、ストレス、緊張状態などの精神状態や身体状態の不安定さである。現代社会は時間に追われ、多くの情報に埋もれ、造形的な環境の中で、緊張状態に置かれることが多い。現代人は癒しを求め、癒しに関連する出来事に関心を抱いている。癒しを使った広告や言葉は巷に氾濫している。癒しの音楽、癒しグッズ、癒し系女優、アロマセラピー³⁾、ハーブ、エステ、タッチ⁴⁻⁵⁾、ヒーリング芸術、カウンセリング、温泉ブーム、時(四季)の流れなど、ゆったりした自然や優雅でゆるやかな時間の流れや関係に浸る事などどうたい文句を並べている。そこにはリラクセス、リラクゼーションが根底にあり、自律系神経、ホルモン系や免疫系に働きかけ、ストレスや疲労回復に役立つと言われている。体と心は互いに影響しあっている⁶⁾。日頃、何でもない「お

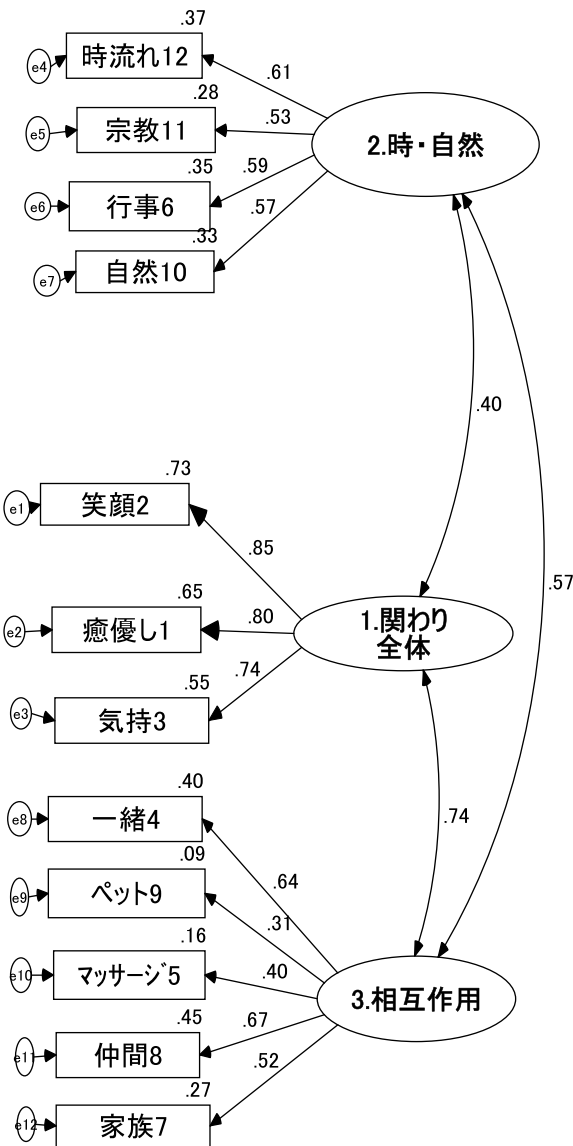
はよう」が、ある日には癒されたと感じることもある。同じ条件でも癒される人、癒されない人がある。そこには個々の感情、相互作用などの状況で違う。癒しはヒーリング healing と訳されている。ヒーリング healing⁷⁾は心身に働きかけて生命力・自己治癒力を引き出し、治癒・回復を促す活動である。

「癒し」とは他者との関係、日常生活、自然や時の流れの中で五感に働きかけることによって、ストレス・不安・緊張状態が和らげられ、凝り固まった心がほぐれ、ゆったりした気持ちになり、暖かな・ぬくもりのある感情が湧き起こり、そこから新たなエネルギーが湧き上がり、前向きな気持ちへと変化していく

心の過程である。そこには体がほぐれれば心がほぐれ、心がほぐれれば体がほぐれように体と心は互いに影響しあって切り離して考えることはできない。しかし、癒しとはどちらかといえば、心の変化、気持ちに重きを置いた言葉である。

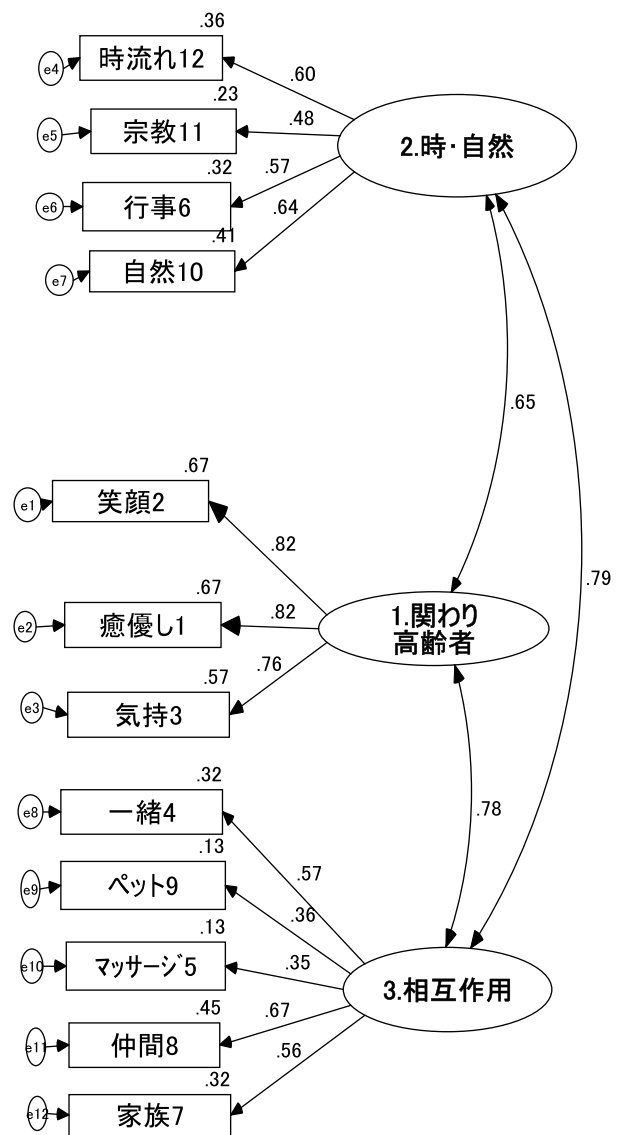
2) 癒された経験について

癒されたと感じた経験を見ると、相互行為や関わりの内容、自然と時の流れの二グループに分けることができる。自然と時の流れを除くと他者との関係が浮き彫りになってくる。人は人によって傷つき、「人によって癒される⁸⁾」とよく言われる。看護職が体験し



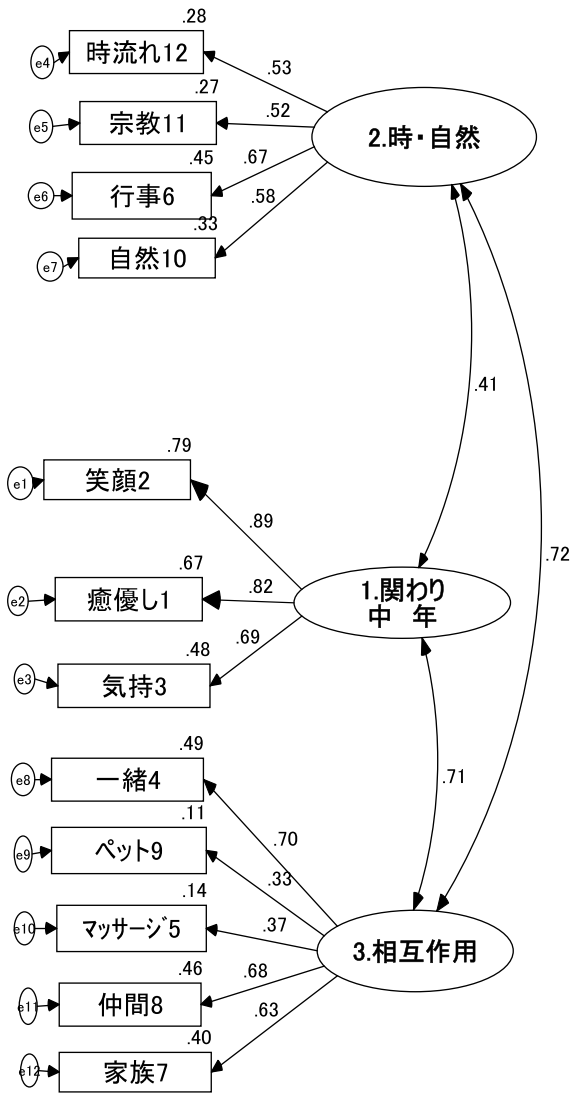
全体 n=521 C.R. >1.96乖離度/自由度2.34 GFI0.96
AGFI0.94 CFI0.95 RMSEA0.05 AIC173.70

図2 全体の癒し (標準化推定値)



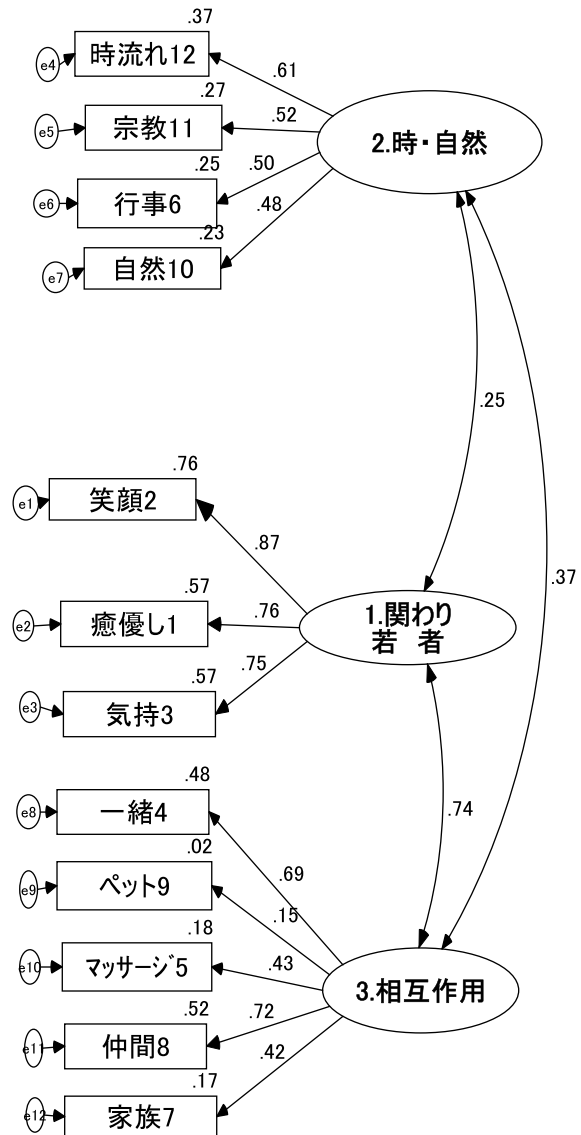
高齢者 n=169 C.R. >1.96乖離度/自由度1.84 GFI0.91
AGFI0.87 CFI0.92 RMSEA0.07 AIC148.01

図3 高齢者の癒し (標準化推定値)



中年 n=175 C.R. >1.96 乖離度/自由度2.27 GFI0.90 AGFI0.84 CFI0.89 RMSEA0.08 AIC170.13

図4 中年の癒し (標準化推定値)



若者 n=174 乖離度/自由度1.73 GFI0.92 AGFI0.88 CFI0.92 RMSEA0.06 AIC141.34

図5 若者の癒し (標準化推定値)

た癒しの根底には人間関係が基盤になっていると考えられる。この調査にその他の項目を追加し、音楽・美術鑑賞・マッサージ・食感など五感に関する内容が出ると考えたが少なかった。

癒しに関して五感の影響力があると言われながらも、人は癒す、癒されることは人間関係が基盤となっていると考えられる。

中でも、関わり方である。関わり方、関わる態度が癒しに大きな影響を及ぼしている⁹⁻¹¹⁾。接する態度すなわち笑顔や気配り、言葉すなわち優しい言葉がけや励ましの言葉、支援すなわち気持ちを汲むである。笑顔・気配りである外見的内容である。人は相手の存

在を感じ、その人が持つ感情を瞬時に捉えていると考えられる。笑顔や気配りは、言葉をかけるというような直接的なかわりではないが、その場にいることを許され、ホットする気持ちや暖かな感情が湧いてくると考えられる。二番目は言葉すなわち優しい言葉がけや励ましの言葉である。何気ない会話の中に、優しさや心のこもった言葉に心がほぐれていく。三番目は支援すなわち気持ちを汲むである。関わりの影響力は外見的な態度、具体的な行為、さらには心への配慮であり表面的から内的に移行している。さらにこのことは日常的に体験する頻度が影響しているとも考えられ

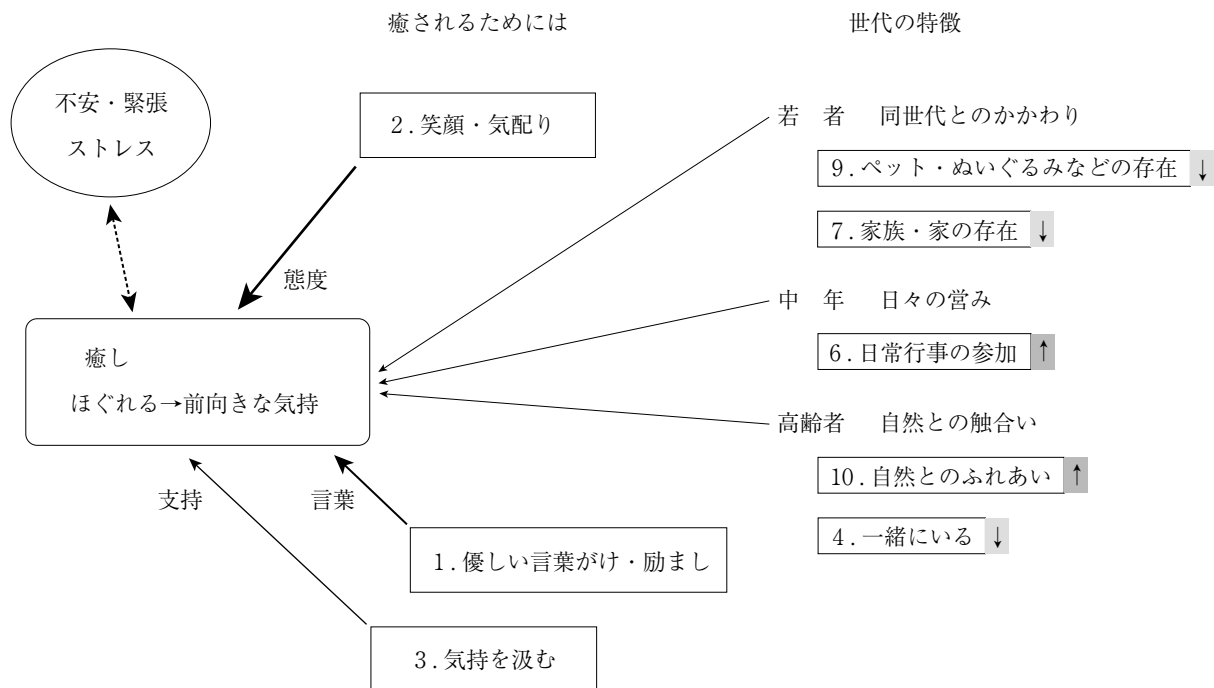


図6 癒しに影響を及ぼす項目と世代比較

る。

3) 癒しへの影響力

多くの場合、高齢者はケアを受ける立場、中年はケアを提供する、さらに若者は今後のケアを担っていく立場と考えられる。そこにはゼネレーションギャップすなわち世代間の認識のズレを考慮したケアが求められる。若者は新人類と言われることが多く、高齢者にとっては理解しがたいことが多い。反対に、若者は高齢者とどのように接したらよいか戸惑っている。

平均値をみると、中年は若者と高齢者との中庸的な回答が多かった。構造で比較すると若者では「9. ペット・ぬいぐるみなどの存在」、「7. 家族・家の存在」の標準化推定値が低い。このことから若者は同世代との関わりが重視され、家族やペットに関しては多様な考え方をしている。中年では「6. 日常行事の参加」の影響力が大きい。このことから中年は日々の生活や労働し、日常の行事を主体的にこなしている。そこには参加の機会が多く、癒しにもつながっている可能性が高い。高齢者は「10. 自然とのふれあい」の影響力が高く、反対に「4. 一緒にいる」の影響力が低い。このことから高齢者は他世代と比べ、自然からの癒し効果が高く、他者からの関わりが癒しにつながり

にくい。全体に、癒されたと感じた項目では低値であった。予想では高齢者が「11. 宗教」「12. 時の流れ」との因果関係が高いと考えたが予想以上に低かった。安定した生活でストレスが少ないとも言える。

ケアを提供する場合、治療を最大限伸ばすためにも癒しが大きな影響力をもつ。癒されたと感じることは心だけでなく体にも大きく影響し、治癒過程（自律系神経、ホルモン系や免疫系など）に大きな影響力を持つ。ケアをする人々はケアを受ける対象が癒しをどのように捉えているか把握し、自己との感覚のズレを認識することは大切である。それを踏まえ、影響力の強い項目から、ケアを実施すると効果的である。

【おわりに】

癒しは病気の治癒過程だけでなく、日常の生活においても大きな影響をもつ。癒しは人間関係を基盤に、五感から影響を受け、心がほぐれ、新たな生活の力となっていく。癒しは体と心は切り離すことはできない。橋本らの看護職が捉えた癒しから、12項目からなる「癒し」尺度を作成した。この尺度を使い2004年9月に調査し、有効回答521を分析した。

癒しは、全体で見ると笑顔や家族によってもたらされた。さらに若者では言葉がけ仲者存在があった。因

子分析の結果、癒しは関わり方、自然や時の流れ、人間関係の3因子に分けることが出来た。この尺度の標本妥当性は高く、信頼性は第1因子では高いが、第2・3因子ではやや低かった。

構造化（共分散構造分析 AGFI=0.94）した。全体から見ると笑顔や気配り、優しい言葉や励まし、気持ちを汲み・支援に大きな影響力がみられた。そこには外面から内面へ、さらに体験する頻度が影響していると考えられる。癒しは、影響力の強い項目から働きかけると効果的である。世代間を比較するために、若者・中年・高齢者に分け構造化した。癒しは若者では仲間、中年では日常行事や家族、高齢者では自然からの影響を多く受けていた。反対に若者ではペットや家族の存在、高齢者では一緒にいる影響が低く、多様な考え方がありと考えられる。

ケアを提供する・教育をする場合に、自己の世代、さらに対象の世代がもつ「癒しの認識」を把握した上で実践に効果的である。本研究は便宜的標本抽出であり、結果をそのまま一般化するのには限界がある。

Abstract

Healing influences treatment and daily life. I made "Healing" standard was consisted of 12 items referring to data. The investigation was executed in September, 2004. It was possible to answer from young person 174 middle ages 178 elderly persons 169.

They were healed "the beaming face" and "the family" influenced healing. In addition, the young were healed "a word" and "a friend". The specimen validity of the standard is high.

Reliability was high in the first factor, and it was a little low in the 2.3th factor. The result was covariance structure analyzed (AGFI0.94). "The beaming face", "the consideration", "an easy word" and "the support of feelings" influenced healing. The approach is effective from the item with strong influence power it. The comparison between generations was done. The influence is large from "the daily event" and "the family" in the middle age, "nature" in the elderly person. The influence is low from

"the pet" and "the family" in the young person, "being together" in the elderly person.

It is necessary to understand generation's "Recognition of healing", and do care and the care education.

【引用・参考文献】

- 1) 橋本和子・道廣睦子・古城幸子・岡須美恵・谷田恵美子・牛尾禮子、2002、『癒しの時代21 看護専門職から21世紀へのメッセージ』、西日本法規出版、岡山。
- 2) 橋本和子・尾原喜美子・道廣睦子・谷田恵美子・岡須美恵、2004、看護職が捉えた「癒し」の分析、看護・保健科学研究 4(1)；1-11。
- 3) 吉田聡子・佐伯由香、2000、香りが自律しんけい系に及ぼす影響、日本看護研究学会雑誌、23(4)；11-17。
- 4) 森下利子・松下正子・草川好子他、1996、意図的 Touch による心拍および脳波への影響と主観的応答に関する研究、日本看護研究学会雑誌、19(臨)；203。
- 5) 近藤浩子・大久保功子・大平雅美・谷本桂、2005、癒し技法としての「タッチ」の評価と看護への応用に関する研究-第1報-、日本看護研究学会雑誌、28(3)；292。
- 6) 中川晶、1995、『こころの癒し方』、講談社、東京；p38。
- 7) 三省堂編修所『デイリー 新語辞典』、三省堂。
- 8) 石川恭三、2002、『ほどほど人生のすすめ - 老いとのつきあい方・癒し方-』、海竜社、東京、p 101。
- 9) 川島みどり、1997、『看護の癒し - そのアートとサイエンス 看護治療学への道-』、看護の科学社、東京。
- 10) 柏木哲夫、2001、『癒しのユーモア - いのちの輝きを支えるケア-』、三輪書店、東京。
- 11) 中川米造、1989、『<癒し>のまなざし』、福村出版、東京。